

# グローバルヘルス合同大会



甲南女子大学大学院看護研究科博士前期課程

## 山本 貴子

看護師として病院勤務後、2017-2019年JICA青年海外協力隊ボランティアとしてボリビア多民族国に派遣。2020年より甲南女子大学大学院看護研究科博士前期課程に入学。



甲南女子大学大学院研究生・  
兵庫県立大学地域ケア開発研究所非常勤研究員

## 柳澤 沙也子

看護師として病院等で勤務した後、2015-2017年JICA青年海外協力隊としてインドネシア共和国に派遣。NPO法人Rehab-Care for ASIAインドネシア事業リーダー。

## 初の4学会合同大会

2020年11月1～3日、グローバルヘルス合同大会2020 大阪（以下、本大会）が開催されました。本大会は日本熱帯医学会、日本国際保健医療学会、日本渡航医学会、国際臨床医学会の4学会の合同大会です。これまで日本熱帯医学会と日本国際保健医療学会の2学会合同大会が定期的に開催されてきており、2017年には日本熱帯医学会、日本国際保健医療学会、日本渡航医学会の3学会合同大会が開催されました。しかし、グローバルヘルスにかかわる4学会による合同大会は今回が初めてとなります。

本大会のテーマは、「チャンプール！交じる、つながる、支えあう」です。チャンプール(campur)は、インドネシア語で混じりあうという意味で、マレー語や沖縄語でも使用されています。国内外において異なる背景を持つ4つの学会が各々の専門性を堅持しつつ成果を共有する機会にしたいとの思いによるものです。

本大会の各大会長は、第61回日本熱帯医学会大会 金子 明さん（大阪市立大学）、第35回日本国際保健医療学会学術大会 中村安秀さん（甲南女子大学・日本WHO協会）、第24回日本渡航医学会学術集会 南谷かおりさん（りんくう総合医療センター）、第5回国際臨床医学会学術集会 中田 研さん（大阪大学）です。大阪にゆかりがある大会長の4名が、工夫をこらして本大会を開催しました。

当初、本大会は大阪大学吹田キャンパスにて実施される予定でした。日曜日と祝日を含む3日間での開催ということ

から、全国からグローバルヘルスに関心を持つ人々が大阪に集う、にぎやかな会を予定していました。しかし、COVID-19の大流行から、一か所に参加者が集まる形は断念し、オンラインで開催しました。2020年は数多くのオンライン学会やオンラインセミナーが開催されましたが、急遽初めてのオンライン開催となった場合や、開催中止を余儀なくされた学会も少なくなかったでしょう。本大会も、2019年夏から会場の確保やタイムスケジュール、招待演者、懇親会等、準備委員により様々なセッティングを行っていた中での急展開となりました。中止も視野に入れていましたが、各学会の理事会等で開催の可否を伺い、慎重に検討した結果、当初の予定よりも規模を大幅に縮小し、オンラインにて開催することとなりました。

はじめてのオンライン学会開催ということで、当日までの準備についても手探りの中で進めていきました。2019年夏より大阪府下にて集まっていた準備会も、

COVID-19に伴う緊急事態宣言発令に従いWebにて実施していきました。各シンポジウムのテーマもCOVID-19に関連する話題に絞ると共に、オンライン学会となったことに伴う変更点や新たな検討事項について、可能な限り丁寧に議論を進めていきました。

本大会はオンライン会議ソフトウェアZOOMのウェビナー機能を使用して開催しました。ZOOMはコロナ禍においてウェブ会議や大学の講義、オンラインセミナー等で使用する方が急増しており、11月の本大会開催時はすでに利用したことのある方も少なくはありませんでした。しかし、ZOOMでの大会開催は、急な停電やトラブル等による学会の中断の恐れもありました。専門業者に各会場のホスト役等を依頼することで、経費はかかっても確実に本大会を運営していくこととしました。さらに、遠隔医療を含むICTを熟知した九州大学病院国際医療部にも後方支援を依頼しました。

本大会はオンライン開催ではありません



閉会式終了直後の4大会長と関係者（左から、南谷かおり氏、金子明氏、自見はなこ氏、澤芳樹氏、中田研氏、中村安秀） オンライン運営センターがある大阪駅前の梅田スカイビルに4大会長が集まったのは、開会式直後の4学会合同イベントとこの閉会式だけだった。



公益社団法人日本WHO協会 理事長

## 中村 安秀

甲南女子大学教授・大阪大学名誉教授。和歌山県御坊市出身。小児科医。インドネシアやパキスタンなど国際保健の現場で活躍し、母子手帳を世界に広めた。現在は国際小児科学会理事。どこの国にいても子どもがいちばん好き。

たが、運営本部は大阪市内に設置して密なやり取りをできるようにし、一方でシンポジウムを録画する等の後方支援は、可能な限り準備委員の各職場や自宅等から行うこととしました。4名の大会長であっても、最初と最後の4大会合同セッション以外は、ほとんど顔を合わせることなく運営を進めていきました。これまで顔を合わせて議論を進めることが当たり前だった中、このような形で本大会を進めていったことは、まさにグローバルヘルスの新たな時代の幕開けでした。

一方、オンライン開催としたことで、制約が多かったことも否定できません。当初は多くのシンポジウムや口頭発表が同時時間帯に開催される予定でしたが、オンラインで安定した開催を試みたため、シンポジウムや口頭発表の数は大幅に縮小しました。当初は英語セッションを1日通して閲覧できるという案もありましたが、運営上困難でした。また、一か所に人の集まる学会では当日の参加申込者も一定数見込まれますが、オンライン開催によるシステム上、開催当日の参加受付を行うことは本大会では非常に困難でした。このため、参加申込は事前申込みとし、申し込み頂いた参加者の方には大会終了後にも約1か月間各シンポジウムを視聴して頂けるオンデマンド配信を行いました。参加受付フォームがスムーズに機能しない場合や、口頭発表やポスター発表の演者の方々の演題発表に関する連絡に時間を要する等、演者・参加者の皆様にご迷惑をおかけしたこともありました。しかしながら、このような状況であっても、多くの方にご参加いただくことができ、素晴らしい大会となりました。

## 1,400名以上の参加者が集まった合同大会

おかげさまで、本大会では8つの基調講演、2つの4学会合同イベント、22のシンポジウム（うち6つは英語でのセッション）、5つのランチョンセミ

ナー、36の口頭発表と167のポスター発表が行われ、海外24か国からの参加者を含む、計1,403名の方々にご参加いただきました。セッションの一部をご紹介します。当大会の開会式後に行われた基調講演1「パンデミックのガバナンスを考える」では、白井こころさん（大

**グローバルヘルス合同大会  
2020 大阪**

Joint Congress on Global Health 2020 in Osaka

**大会長** 第61回 日本熱帯医学会大会  
金子 明(大阪市立大学)

第35回 日本国際保健医療学会学術大会  
中村 安秀(甲南女子大学・日本WHO協会)

第24回 日本渡航医学会学術集会  
南谷 かおり(りんくう総合医療センター)

第5回 国際臨床医学会学術集会  
中田 研(大阪大学)

交じる、つながる、支えあう

チャンプルー!

Campur! Integration, Solidarity and Collaboration

**会期** 2020.11/1日 - 3日

Date : November 1(Sun.) - 3(Tue.), 2020

**グローバルヘルス合同大会2020は  
オンライン開催といたします**

Joint Congress on Global Health 2020  
to be Held as an Online Meeting

■ 運営事務局 株式会社JTB 西日本MICE事業部 (営業時間:9:30~17:30 土・日・祝祭日は休業)  
〒541-0058 大阪市中央区南久宝寺町3-1-8 MPR本町ビル9階  
Tel:06-6252-5049(9:30~17:30) Fax:06-7657-8412 E-mail: gh2020@jtb.com

<https://www.gh2020.jp/>

本大会ポスター

阪大学医学系研究科社会医学講座)座長のもとマイケル・R・ライシュさん(ハーバード大学公衆衛生大学院教授)が招待され、「パンデミックのガバナンスを考える」をテーマに講演されました。

講演では、ライシュさんは、日本政府とアメリカ合衆国政府とのCovid-19対応の違いについて、各政府を空港の管制塔であると例え、管制塔(=政府)が正しく指令を送り機能しなければ飛行場(=社会や国民など)はパニックに陥ると話されていました。当初COVID-19の流行下のアメリカ合衆国では、COVID-19予防のために、マスクの装着は必要ないとされていました。一方、日本政府は初期の段階で、密閉、密集、密接の3密を避け、社会的距離を保つなど明確なメッセージを国民に伝えていました。両政府の対応の違いは大きく、このようなパンデミック下の政府の役割のひとつとして、社会や国民が判断を誤る

ようなミスリードを避けることが重要であると話されていました。基調講演1の内容は、誰にでもイメージが付きやすく、かつ分かりやすい内容や表現で構成されていました。言語も日本語が主で使用されましたが、ところどころ英語も混ざり、まさにチャームな基調講演から大会の幕が開きました。

基調講演3「Ebola Diseases from the perspective」では、微生物学者で第3回野口英世アフリカ賞を受賞されたジャン=ジャック・ムエンベ=タムフムさん(コンゴ民主共和国出身)に、ビデオ録画でご講演をいただきました。基調講演6「ウィズ・コロナ時代のユニバーサル・ヘルス・カバレッジ」では、日本の参議院議員でWHO親善大使でもある武見敬三さんから今後の世界や日本の保健医療のあり方などについても話していただきました。

その他のシンポジウムでは、

COVID-19流行下での看護師や医学生、医療通訳士などの近況の他、感染症と人類の歴史、国際保健における女性の役割、高齢化対策など国際保健に関するバリエーションに富んだ内容となりました。

各3日間で行われた5つのランチオンセミナーもオンライン上での開催のため、各自昼食を準備して参加して頂く、普段とは異なるセミナー形式となりましたが、お昼の忙しい時間にも関わらず多くの方に視聴頂きました。閉会式前に行われた、4学会合同理事長のパネルディスカッションでは、狩野繁之さん(日本熱帯医学会理事長)中野貴司さん(日本渡航医学会理事長)、神馬征峰さん(日本国際保健医療学会理事長)、澤芳樹さん(国際臨床医学会理事長)と当大会の大会長4名に加え参議院議員の自見はなこさんが参加され、コロナ後のグローバルヘルスの未来像について熱い議論が交わされました。閉会式ではパネルディ

## グローバルヘルス大阪宣言 2020

(OSAKA Declaration at Joint Congress on Global Health 2020)

2020年11月1日

グローバルヘルス合同大会 2020

- 第61回日本熱帯医学会大会 大会長  
金子 明(大阪市立大学)
- 第35回日本国際保健医療学会学術大会 大会長  
中村 安秀(甲南女子大学・日本WHO協会)
- 第24回日本渡航医学会学術集会 大会長  
南谷 かおり(りんくう総合医療センター)
- 第5回国際臨床医学会学術集会 大会長  
中田 研(大阪大学)

日本ではじめて、異なる背景をもつ4つの学会が集うという記念すべき「グローバルヘルス合同大会2020」において、第61回日本熱帯医学会大会、第35回日本国際保健医療学会学術大会、第24回日本渡航医学会学術集会、第5回国際臨床医学会学術集会を代表して、私たちは、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の影響下にある世界のすべての人びとの健康と幸福(health and well-being)を願い、グローバルヘルスの発展に寄与するために大阪宣言を策定する。

2020年1月30日、世界保健機関(WHO)が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」(Public Health Emergency of International Concern: PHEIC)を発生したとき、COVID-19の世界の感染者数7,818人、死者170人であった。そのうち、中国以外では、わずか18か国82人の感染者数が報告されていた。

COVID-19はいま(2020年10月25日現在・WHO報告)、全世界で約4,250万人の累計感染者数、約114万人を超える死者数を呈し、後世に語り継がれるに違いない歴史的な感染症と私たちは真正面から対峙することになった。

日本国内および地球規模において、今後COVID-19がどのように変遷していくのか、やがてどのように収束し、そして終息するのか、将来このウイルスがどのような形で人類と共生するようになるのか、まだまだ予測がつかない状況である。一方、感染症と人類の長い歴史から学ぶと、現在のような緊張感のある状態がいつまでも続くわけではなく、新たな生活・社会を受け入れていくことは自明である。

私たちは、以下の項目に合意し、大阪宣言として広く社会にアピールする。グローバルヘルスという学問分野が、COVID-19を契機として、チャンプルー(混じりあう)という発想を活かし、学際的に展開することを願う。

### 国際協力

パンデミック(世界的大流行)になったCOVID-19は、もはや自国だけで解決することは困難である。仮に日本国内で感染を終息させることに成功しても、地球上に大きな流行地がある限り、感染対策を継続する必要がある。いままこそ、国際保健医療協力の実と量と質を拡充し、研究調査と実践活動の両面からグローバルヘルスに関する国際的な協力・交流を積極的に推進すべきである。

### だれひとり取り残されない

「持続可能な開発目標(SDGs)」の理念に立ち返り、COVID-19対策の実施にあたり、貧困、教育、労働、環境、ジェンダーなど学際的な視点から「だれひとり取り残されない」対策となるように万全の配慮を行うべきである。

### 感染症対策

過去20年間、国際社会は結核、HIV/AIDS、マラリアの3大感染症、さらには隠みられない熱帯病に真摯に向きあい、流行地における対策のスケールアップを加速させてきた。その解決の糸口が見えてきた矢先でCOVID-19パンデミックは直撃した。国際社会はこれら貧困に関連する疾患への闘いを止めてはならない。いま人類は新たな生活・社会における新たな統合戦略を見出していく必要がある。

スカッションに登壇された先生方と準備委員一同が ZOOM 画面に映し出され、中村 安秀さんの挨拶の後、蛍の光と多言語による「ありがとう」の言葉と共に、大会の幕が閉じました。

本大会は、いろいろな制約や困難で準備委員一同悩みながらの開催となりましたが、オンラインの利点でもある世界各国からご参加頂け、オンライン大会の可能性も見出すことができ、まさにグローバルな大会となりました。

## 大阪宣言 (OSAKA Declaration)

本大会の大会長 4 名により、大阪宣言 (OSAKA Declaration) が出されました。日本ではじめて、異なる背景をもつ 4 つの学会が集うという記念すべき本大会において、COVID-19 の影響下にある世界のすべての人びとの健康と幸福 (health and well-being) を願い、グロ



閉会式での集合写真

ーバルヘルスの発展に寄与するために策定したものです。詳細は以下をご参照ください。

本宣言の反響は非常に大きく、各学会の学会誌等に大阪宣言を掲載し、広く周知していく予定です。

## ポストコロナのグローバルヘルスの発展に向けて

COVID-19 の世界的流行により、移

動の制限がかかり、以前のように他国へ自由に行き来することは困難となりました。海外での国際協力や調査等を行うことは容易ではなくなりました。海外に渡航する場合も、海外から入国する場合も感染症を持ち込まない、持っていないという点で非常に制約がかかるようになりました。2021 年に延期された東京オリンピックの開催は危ぶまれ、インバウンドや留学生等の入国も困難な状態です。

しかし、グローバルヘルスの分野は絶望ばかりではありません。過去に世界各地で流行した感染症についての歴史を振り返ることや日本で過ごす在外外国人のサポート等、コロナ禍だからこそグローバルヘルスの果たす役割は様々な面があるでしょう。ウェブ会議等を通じて国内外で容易に連絡を取り合えるようになったことも大きな成果です。何より、COVID-19 の流行により海外だけでなく日本国内の医療・経済等あらゆる分野がひっ迫している今だからこそ、国際協力が必要であると改めて感じた大会でした。本大会の開催が、さらなるグローバルヘルスの発展の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、4 学会の大会長をはじめ、準備委員の皆様、シンポジウム、口頭、ポスターでご発表いただいた方々、オンライン視聴の形でご参加いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

**非感染性疾患**

感染症とともに、非感染性疾患 (NCDs) は依然として大きなグローバルヘルスの課題である。とくに、NCDs の 4 大リスクの一つである身体不活動 (physical inactivity) は、COVID-19 による人と人との接触を避ける施策などにより顕著になっている。今後、NCDs やメンタルヘルスのリスクの上昇が危惧され、世界規模での注意深い観察と適切な対応が重要である。

**国境を超えて**

ウィズ・コロナの時代において、国境を超える移動に困難を生じている外国人や日本人に対して、ひとりひとりの人権とニーズに配慮したきめ細かな対策を講じるべきである。

その上で、グローバルヘルスを地球規模で進めていくには、医療と健康において、言語、文化、宗教、信条の違いを越える社会的包摂 (social inclusion) が重要である。各国の医療選択サービスを食むグローバルな保健医療体制をより充実し、それぞれの国や地域の特色ある強みを生かしつつ、地球規模で相互に発展する仕組みづくりをめざす。

**PHC と UHC**

ポスト・コロナ時代において、新たな新興感染症が発生する蓋然性は非常に高い。その準備として、この半世紀の間に築きあげてきた保健医療に関する世界的な理念であるプライマリヘルスケア (PHC) とユニバーサル・ヘルス・カバレッジ (UHC) に真摯に向き合い取り組むべきである。

**グローバルヘルス教育**

COVID-19 により、海外との往来が厳しく制限され、グローバルヘルスの教育研究の現場である中低所得国におけるフィールド活動ができなくなった。そのような状況にもかかわらず、グローバルヘルスに関心を寄せ、この分野で仕事したいという意欲にあふれる若い世代の方々がいることは誠に心強い。グローバルヘルス合同大会 2020 を契機に、グローバルヘルスに関するデジタル教材開発など、若い世代に向けた教育の提供に積極的に関わることは、学会の大きな社会的使命である。

以上